慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二つの相互循環 : 社会学的認識の基本特性
Sub Title	
Author	吉田, 民人(Yoshida, Tamito)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997.) ,p.22- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 I : 社会学の方法とリアリティ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学 第2号(1997)

二つの相互循環
社会学的認識の基本特性

吉田民人

編集担当から与えられた課題は「あなたにとってリアルな社会学的認識とはなにか」、あるいは「あなたにとって社会学的リアリティとはなにか」といった類のものである。この小論では、研究対象の側に由来するリアリティ問題と研究主体の側に由来するリアリティ問題とに分けて検討してみたい。

I　事実的秩序と情報的秩序との相互循環——対象の側の社会学的リアリティ——

A 事実的秩序と情報的秩序

01】社会学の研究対象とされる社会システムおよび個人システムの秩序は、プログラム科学の立場からすれば、大きく事実的秩序と情報的秩序に分かれる。「事実的秩序」とは、当事者または研究者が社会的・個人的事象の一定の領域で、間主観的または個人主観的に認知する、共時的・通時的、一回起的・反復的な事象のパタン——行為や過程や構造や変動、等々のパタン——と定義することができる。パタンとは「一定の認識主体の差異化＝分節機構（脳神経的な差異化＝分節と言語的な差異化＝分節の機構）によって差異化・分節された状態」つまり「認識可能な状態」を意味している。それに対して「情報的秩序」とは、事実的秩序の背後にあってそれを規定・制御する、間主観的または個人主観的な一定の記号集合と定義することができる。ここで「秩序」とは価値中立的なコンセプトであり、任意の価値観にもとづく良い秩序も悪い秩序も含まれている。

02】事実的秩序は、後述の議論を先取りすれば、社会システムの事実的秩序にせよ個人システムのそれにせよ、1）間主観的な情報的秩序で規定される成分、2）個人主観的な情報的秩序で規定される成分、3）状況的要因で規定される成分、という3つの成分で構成されている。社会や個人のどれほどアノミー的な状態であっても、何らかの間主観的・個人主観的な情報的秩序で規定される成分を含んでいる。たとえば、間主観的・個人主観的に貯蔵された後述の「類型システム」にまったく依拠しないようなアノミー状態は、考えられないだろう。アノミーは本稿でいう秩序の特殊事例であり、後述する第2層（貯蔵メッセージと貯蔵プログラム）の間主観的な情報的秩序の部分的・全面的崩壊、およびその結果としての間主観的な事実的秩序の喪失を意味している。

03】本稿でいう事実的秩序はまた、事象の一回起的パタンと反復的パタンの双方を含んでいるが、それは、具象性－抽象性の連続体（continuum）において、具象性を高めるほど一回起的パタンが、抽象性を高めるほど反復的パタンがそれぞれ差異化＝分節可能、つ

まり認識可能になると了解されているからである。だが、通例の意味での秩序は事象の規則性として、事象の反復的パタンに限定されることが多い。しかしながら、事実的秩序を反復的パタンに限定すれば、事象の一回起的個性を秩序論から排除せざるをえなくなる。秩序コンセプトの射程をできるだけ広く設定する――それが望ましいとして――ためには、「一回起性と反復性」を「具象性－抽象性の連続体」という視角で位置づける必要がある。後述する貯蔵水準の情報的秩序は、間主観的と個人主観的の別をとわず、基本的に反復的なものであるから、事実的秩序の一回起的な個性は、主として千変万化する状況的要因、およびそれを反映するかぎりでの、後に定義される、作業水準の情報的秩序に起因することになる。

B　各種の記号集合としての情報的秩序

04】情報的秩序を担うのは一定の記号集合であるが、社会システムと個人システムの場合、記号は、第1に内記号と外記号、第2にシンボル記号と疑似シグナル記号とシグナル記号とを分ける必要がある。内記号とは記号を担う物質エネルギー、すなわち記号担体が脳の内部にあるような記号形態であり、感覚・知覚、運動・動作神経信号、心像や内言語などがそれである。外記号とは、記号担体が脳の外部にあるような記号形態であり、アイコンや外言語、あるいは雷鳴それ自体（雷鳴の知覚や心像、あるいは雷鳴という言語記号ではなく）を指示する雷光それ自体（雷光の知覚や心像、あるいは雷光という言語記号ではなく）のような物理・化学法則に根拠をもつ自然記号などがそれに含まれる。

05】シグナル記号とは、感覚・知覚、運動・動作神経信号、雷鳴それ自体を指示する雷光それ自体のように、記号とその指示対象とが物理・化学的に結合するような記号形態であり、かならず指示対象をもつが、意味表象をもたない。シンボル記号とは、心像やアイコン、内言語や外言語のように、記号――厳密にはその表象――が、学習の結果、その意味表象と脳内で物理・化学的に結合するような記号形態であり、かならず意味表象をもつが、指示対象をもつとは限らず、もつとしても意味表象に媒介されてしか指示対象と結合しない。ちなみにソシュールのいう記号（記号表現と記号内容のセット）は、内シンボル記号とその意味表象に限定されている。

最後に、疑似シグナル記号とは、シンボル記号の営みがいわば「条件反応」化した結果、その本来の特性である表象媒介性が脱落ないし希薄になった、しかしながら常に表象媒介性が復活しうるような記号形態を意味している。ギデンズのいう実践的意識やブルデューのいうプラティークは、この疑似シグナル性の情報的秩序と関連しているといってよい。曲がりなれたコーナーを無意識に曲がる習慣的・条件反応的なナヴィゲーション行動は、「認知的な疑似シグナル外記号」（目印コーナー）に対する「指令的な疑似シグナル内記号」による反応と解釈することができるだろう。後述する用語でいえば、疑似シグナル記号で構成された作業プログラムの作動にほかならない。

この小論では、もっぱらシンボル記号の中核をなす言語記号によって担われる情報的秩

序――疑似シグナル性の言語情報的秩序を含めて――を主題にすえることにしたい。なお、情報的秩序は記号集合によって構成されているが、事実的秩序についての情報を表現するためにも記号集合は不可欠である。いいかえれば、情報空間はすべて記号集合から構成されているが、情報空間は情報的秩序に限定されないということである。以下とくに断りのないかぎり、情報的秩序といえば、言語情報的秩序を意味させることにしたい。

C　情報的秩序の4類型

06】事実的秩序と区別された情報的秩序は、まず、規範的な情報的秩序と非規範的な情報的秩序とに分けることができる。ここで規範的秩序とは、社会的および／または内面的な正負のサンクションを伴うような情報的秩序であり、非規範的な情報的秩序とは、そのサンクションを伴わない情報的秩序をいう。義務感覚や義務意識という意味での規範性は、正負の内面的サンクションを伴う情報的秩序の特性と位置づけれれている。情報的秩序は、ついで、現実態の情報的秩序と可能態の情報的秩序とを分ける必要もある。現実態の（ないし現行の）情報的秩序とは、規範的にせよ非規範的にせよ、事実的秩序を規定するものとして現に受容されている情報的秩序であり、可能態の（ないし仮想的な）情報的秩序とは、規範的にせよ非規範的にせよ、事実的秩序を規定すべきもの、また規定してほしいものとして思念・提案されている情報的秩序である。たとえば、議会に上程された法案は、可決されるまでは現実態の情報的秩序ではなく、可能態の情報的秩序に属する。「秩序のあるべき姿」や「秩序のありたい姿」に関する間主観的・個人主観的な問題提起や構想である。

情報的秩序の規範性と可能態（ないし仮想性）とを混同すべきではないし、可能態の（ないし仮想的な）情報的秩序には「あるべき秩序」と区別された「ありたい秩序」も含まれていることに注意したい。

07】以上の2つの軸を組み合せるなら、1）現実態の規範的な情報的秩序、2）現実態の非規範的な情報的秩序、3）可能態の規範的な情報的秩序、4）可能態の非規範的な情報的秩序、という4タイプの情報的秩序を識別することができる、いや識別しなければならない。「秩序のありたい姿」や「秩序のあるべき姿」についての問題提起や構想は、研究者によるものばかりでなく、当事者によるものも多々存在するが、さしあたり、可能態の情報的秩序に属する議論なのである。規範的な情報的秩序についても非規範的な情報的秩序についても、現実態の情報的秩序と了解されているものと、情報的秩序についての提案と了解されている可能態のそれとを混同してはならない。現実態と可能態の2極分化は、指示対象と意味表象とが分化するシンボル性情報空間に独自の特徴であるが、実際にはボーダーラインが曖昧であり、両者は連続していると見るべきかもしれない。以下、主に情報的秩序の現実態に限定して分析を進めたい。

D　情報的秩序の3層構造

08】上述の意味での現実態の（ないし現行の）情報的秩序は、規範的か非規範的かの別

をとわず、貯蔵水準と作業水準、コード領域とメッセージ領域という2セットの軸で記述することができる。すなわち、貯蔵コード水準、貯蔵メッセージ水準、作業コード水準、作業メッセージ水準という4象限である。だが、作業水準におけるコードとメッセージは密接に関連しているからこれを一括し、言語的な情報的秩序を、つぎのような3層構造を成していると捉えることにしたい。以下、層と水準はほぼ同義で使用されている。

まず第1層は、貯蔵されて潜在態にある意味論的コードと統辞論的コードならなる言語コード、すなわち貯蔵コードの水準であり、社会学的にはとりわけ意味論的コードが重要である。意味論的コード（単語とその意味）は、社会学的観点からすれば、1）行動の個体的・集合的主体に関わる概念・カテゴリー群と、2）行動の状況に関わる概念・カテゴリー群、そして3）行動それ自体に関わる概念・カテゴリー群が相互連関する「類型システム」にほかならない。関連する諸概念を包括するのがカテゴリーであるが、そのカテゴリーを一つの概念として、さらに上位のカテゴリーが成立するという階層性が存在している。たとえば、講義、学生、教授、学部、専攻、単位、等々の諸概念が大学カテゴリーを構成し、大学、高校、中学、塾、等々の諸概念が教育組織カテゴリーを構成する、といった具合である。同一の概念が多くの異なるカテゴリーに組み込まれうることはいうまでもない。この「類型システム」には普通名詞以外に個人名その他の固有名詞が含まれていることにも注意したい。会社関係、友人関係、近隣関係、等々のカテゴリーにまとめられる個人名リストは、その一例である。

09】ついで情報的秩序の第2層は、貯蔵されて潜在態にあるメッセージ（文とその意味）および貯蔵されて潜在態にあるプログラム、すなわち「貯蔵（stored）メッセージと貯蔵（stored）プログラム」の水準である。第1に、貯蔵メッセージは、認知的、評価的、指令的という3種の情報機能を担いうる。この視点からすれば、貯蔵メッセージは認知・評価・指令メッセージと3分されることになる。第2に、貯蔵プログラムは、行動の個体的・集合的主体に関するメッセージと状況に関するメッセージと行動自体に関するメッセージの相互連関システムとして構成されている。それは、f（主体、状況、行動）＝0と表現しうるような陰関数の形式をもつ陰（implicit）プログラムと、行動＝f（主体、状況）、主体＝f（行動、状況）、あるいは 状況＝f（主体、行動）などと表現しうるような陽関数の形式をもつ陽（explicit）プログラムとに分かれる。時間割表や組織図や地位－役割システムは陰プログラムの事例であり、慣習や倫理や習慣は通例陽プログラムとして了解されている。一つの陰プログラムから多くの陽プログラムを導出することができる。陽プログラムは一般に＜if～, then～＞という形式をもっている。

「諸メッセージの相互連関というプログラムの構造」と「プログラムが担う認知・評価・指令の情報機能」とは区別されなければならない。同一の構造をもった陰プログラムまたは陽プログラムが、認知的、評価的、指令的という異なる情報機能を担いうるからである。たとえば、行動＝f（主体、状況）という陽プログラムは、一定の行動を指令するプログ

ラムとは限られない。それは一定の行動についての認知を与えるプログラムでもありうる。認知メッセージ、評価メッセージ、指令メッセージを生成する機能を担わされた陰および陽プログラムを、それぞれ、認知、評価、指令プログラムと名づけよう。

10】時間割を例にとれば、f（曜日、時限、科目、教室、担当者）＝0の形式で表現される時間割表が陰プログラム、それに対して、たとえば時限＝f（曜日、科目、教室、担当者）の形式で表現されるのが陽プログラムである。陽プログラムのこの事例でいえば、従属変項とされる「時限」は、当該の（曜日・科目・教室・担当者を指定された）授業が当該の時限に行われるという認知を与える場合もあり、当該の授業が当該の時限に組まれていることへの評価と結びつく場合もあり、当該の授業を当該の時限に受講せよという指令を与える場合もある。すなわち、時限＝f（曜日、科目、教室、担当者）という同一の構造をもった陽プログラムが異なる情報機能を担いうるのである。この点は、陰プログラムについても同様である。f（曜日、時限、科目、教室、担当者）＝0という同一の陰プログラムが教育活動の現状を認知させることもあり、教育活動の評価に結びつくこともあり、実現すべき教育活動を指令するすることもある。

11】＜if～, then～＞という形式をもつ陽プログラムをより詳細に記述するなら、「一定の直列的・並列的に結合する指令メッセージ群（従属変項）とそれらの指令メッセージの起動条件を指定する認知的・評価的メッセージ群（独立変項）とからなるメッセージ集合」となるだろう。この陽プログラムの出力が認知メッセージか、評価メッセージか、指令メッセージかの相違によって、認知、評価、指令プログラムが定義されるわけである。たとえば、病名を確定する診断プログラムは認知プログラム、成績を判定する採点プログラムは評価プログラム、休日に外出か読書かの選択を決めるプログラムは指令プログラム、のそれぞれ事例になる。

社会システムの慣習や制度、倫理や法、作法や規則、個人システムの生活様式や習慣や持続的な意図、そして各種の社会的・個人的な規範、等々は、第1層の類型システムにも後述する第3層の顕在態の情報的秩序にも関わるが、第1義的には、すべてこの第2層の情報的秩序に属している。慣習のように自生的に形成されて自生的に間主観化されるプログラムもあり、実定法のように制定的に形成されて制定的に間主観化されるプログラムもある。個人システムのケースでいえば、自生的な習慣もあり、意図的な持続的目標もある。

12】最後に、情報的秩序の第3層、すなわち「作業（working）水準」の情報的秩序とは、現実に認知的、評価的、指令的な制御機能を発揮する顕在態のメッセージと顕在態の陽プログラム、ならびにそれらに使用される顕在態のコードから成り立っている。すなわち、規範的・非規範的な情報的秩序はまず可能態（仮想性）と現実態（現行性）とに二分され、その現実態がさらに潜在態（貯蔵水準）と顕在態（作業水準）とに分かれるということになる。

作業プログラムとそれを起動させる作業メッセージは、一方、当該システムの第1・第

2層の情報的秩序（貯蔵された類型システムや貯蔵されたメッセージとプログラム）と各種の状況的要因に規定されて生成するが、他方、状況的要因と相呼応して当該システムの共時的・通時的、一回起的・反復的な事実的秩序を産出する。より具体的にいえば、一方、作業プログラムとそれを起動させる作業メッセージは、相互循環しながら限定または新たに開示される主題的（ゴフマンのいうフレームを含めて）レリヴァンスと問題解決的レリヴァンス、ならびにそれらを通底する記号論的レリヴァンスによって選択・確定される。他方、事実的秩序の産出は、一般に、作業プログラムとそれを起動させる作業メッセージとの未定部分を状況的要因に依拠してアドホックに、ときには即興的に確定しながら、また作業プログラム・作業メッセージの既定部分をこれまた状況的要因に依拠してアドホックに、ときには即興的に変更しながら、達成・実現される。すなわち作業プログラムは、その生成から作動までに一定時間の経過を伴う計画的・持続的なものから、生成の一瞬後には作動する即興的・非持続的なものまで、さまざまのタイム・スパンをもっている。

13】「作業（working）水準」というコンセプトは、作業仮説や作業メモリーや作業グループなどの表現で使用される「作業」の含意を活用したコンセプトとして採用されている。この「貯蔵水準」と区別された「作業水準」の情報的秩序という着想は、エスノメソドロジーの研究を位置づけるために有効な視点ではないかと思われる。すなわち、制度や規範を情報的秩序の第3層（作業水準）で考慮するか、情報的秩序の第1・第2層（2つの貯蔵水準）で考慮するか、それら作業・貯蔵の3層すべてで考慮するか、あるいはまた事実的秩序のなかで考慮すべきかという視点の相違にほかならない。本稿は、むろん3層の情報的秩序において――中核は上述のように第2層であるが――考慮すべきことを提案している。規範や制度の在り処をめぐる争点にほかならない。

14】一定の主題が、解決すべき課題を限定または新たに開示し(主題的レリヴァンス)、その課題が、問題にすべき主題を限定または新たに開示し(問題解決的レリヴァンス)、その主題がふたたび、解決すべき課題を限定または新たに開示する、以下同様、あるいは一定の課題が、問題とすべき主題を限定または新たに開示し、その主題が、解決すべき課題を限定または新たに開示し、その課題がふたたび、問題とすべき主題を限定または新たに開示する、以下同様、という相互循環を繰り返しながら、最終的な問題解決へといたる。その間、記号論的レリヴァンスという基準が、1）問題にすべき指示対象とそれを指示する記号との適合性、2）問題にすべき指示対象と付与すべき意味との適合性、3）付与すべき意味とそれを意味する記号との適合性、という3重のレリヴァンスを検討することになる。作業プログラムをめぐる以上3つの生成・選択基準が、A.シュッツのいう主題的レリヴァンス、動機的レリヴァンス、解釈的レリヴァンスに示唆されたものであることはいうまでもない。

この「作業プログラム」と「それを起動させる作業メッセージ」と「状況的要因」とによる事実的秩序の産出が、私のいう「1次の自己組織性」にほかならない。

15】このように、事実的秩序は、一定の情報的秩序と一定の状況的要因とに媒介されて産出される。したがって事実的秩序は、情報的秩序に規定される成分と情報的秩序に規定されず状況的要因によって規定される――たとえば予期せざる結果――成分とから成り立っている。逆に情報的秩序に視点をすえれば、それは事実的秩序を規定する成分とそれをしばしば規定しない――たとえば逸脱されやすい情報的秩序――成分とで構成されている。

16】人間的世界に固有の情報的秩序を「シンボル（とりわけ言語）性の genotype」、また事実的秩序をその「phenotype」と位置づけることもできるだろう。むろん、このメタフォリカルな表現の根拠は、人間的世界に固有の言語情報的秩序と事実的秩序との関連が、プログラム科学の立場から、ＤＮＡ性の genotype とその phenotype との関連に対比しうるからにほかならない。すなわち、社会的・個人的な事実的秩序、すなわち phenotype の生成も消滅も、その維持も変容も、それを支える情報的秩序、すなわち genotypeの生成・維持・変容・消滅と密接に関連している。

17】以上の３層からなる情報的秩序は間主観的なものと個人主観的なものとに分かれるが、情報的秩序の間主観化は、その第１層、第２層、第３層の区別をとわず、２つの形態のものを識別する必要がある。第１タイプは通例の意味での間主観化であり、自然生成的な間主観化である。第２タイプは人為制定的な間主観化であり、一定の制度化された社会的意思決定機構による間主観化にほかならない。人間の死についての認知プログラムをめぐる昨今の議論でいえば、一方、世論の成熟を重視する立場は自生的な間主観化に、他方、議会による法案可決を重視する立場は制定的な間主観化に、それぞれ着目していることになる。現象学が扱う間主観性は自生的な間主観性に傾斜して、制定的な間主観性を軽視ないし無視しているが、人為制定的な間主観化が、近代の法治社会において決定的な役割を演じていることを見逃すべきではないだろう。それは間主観化のプロセスそれ自体を制定的にプログラム化したものにほかならない。自生的な間主観化と制定的な間主観化が、それぞれ、どのようなプログラム――たとえば人の死を判定する認知プログラムと消費税率に関する指令プログラム――の間主観化に適合的かという課題は、軽いものではない。

Ｅ　事実的秩序の産出と情報的秩序のライフ・サイクル

18】ところで、事実的秩序の産出は、ひるがえって当該システムの第１・第２層の情報的秩序、すなわち貯蔵コード（貯蔵された類型システム）と貯蔵メッセージ・貯蔵プログラムを規定し返す、すなわちそれらを生成・維持・変容・消滅させる。すなわち情報的秩序のライフ・サイクルは、事実的秩序の産出のあり方によって規定される。これが、私のいう「２次の自己組織性」にほかならない。社会システムや個人システムの秩序は、情報的秩序と事実的秩序のこうした相互循環によって支えられている。１次の自己組織性（情報的秩序と状況的要因とによる、事実的秩序の産出）と２次の自己組織性（事実的秩序の産出に媒介される、情報的秩序の生成・維持・変容・消滅）によって支えられている、と

表現してもよいだろう。

19】以上にその概要を示した「事実的秩序と3層の情報的秩序との相互循環」という分析枠組みは、「行為と構造との相互規定」という範例的な社会学的課題に対するプログラム科学の立場からする一つの解答である。一方で、「行為」という問題領域を事実的秩序として社会システムの過程的パタンや構造的パタンにまで拡張し、他方で、「構造」という問題領域を3層の情報的秩序として深化させるというこのアプローチが、私の提唱するプログラム科学のものであることに注目してほしい。編集担当から与えられた課題に即していえば、研究対象のなかに私が見出す「私にとって」の社会学的リアリティとは、なによりもまず、社会的・個人的秩序のこの「phenotype（事実的秩序）」と「genotype（3層の情報的秩序）」との二層性、ならびに「それら二層の秩序の相互循環」にほかならない。

II　現実構成をめぐる二つの誤解ないし誤謬――3次元のリアリティ構成――

F　現実の指令的構成の忘却

20】「現実構成」（reality construcion）というコンセプトは、貯蔵水準の情報的秩序（の生成）にも、状況的要因と作業水準の情報的秩序とによる事実的秩序の産出にも適用しうるが、情報空間に媒介される人間的世界の構成という観点は一貫している。どちらの解釈をとるにせよ、それは情報空間一般の特性にしたがって、認知的構成と評価的構成と指令的構成に3分される。この3次元のリアリティ構成について、つぎの2つの誤解ないし誤謬を指摘しておく必要があるだろう。

第1に、「現実構成」といわれるとき、その認知的構成と評価的構成に力点が置かれ、現実の指令的構成という根源的な構成問題が見逃されることがしばしばである。たとえばA.シュッツの場合、現実構成は認知的構成および／または評価的構成と了解され、現実の指令的構成ないし実践的構成という側面が軽視されがちである。時間割表や組織図や地位－役割システムは、現実を認識するための認知プログラムとしても活用されるが、まずもって現実を実践的に構成するための指令プログラムなのである。少なくとも「制度的」現実に限定するなら、認知的構成も評価的構成も、それに先立つ指令的構成の結果を認知、評価するにすぎない。現実の指令的構成こそが、現実構成の、あるいは情報的秩序による事実的秩序の産出の、第一義的な形態なのである。

G　現実の認知的構成と指令的構成との混同

21】第2に、この現実の指令的・実践的構成の忘却とは別の誤謬として、認知的構成と指令的構成との混同がある。私は（記号と）意味表象（Sinn）と指示対象（Bedeutung）との混同というフレーゲの指摘に始まる言語使用の第1のFallacy（明け明星と宵の明星）、および対象言語とメタ言語との混同というラッセルの解決した言語使用の第2のFallacy（クレタ島人は嘘つきであるとクレタ島人がいった）に加えて、言語の認知機能と指令機

能との混同を言語使用の第3のFallacyと命名している。

22】たとえば、一部のソシュール系統の研究者は、「gender」カテゴリーも「sex」カテゴリーもともに言語であり、性の秩序を構成するという。しかしながら、かれらは、「gender」カテゴリーがGENDER現象を実現し、かつ実現されたGENDER現象を認知するという二重の役割を果しているのに対して、「sex」カテゴリーはSEX現象を実現せず、ただ遺伝情報の指令機能によって発現したSEX現象を認知する役割を担うにすぎない、という事実を見逃しがちである。GENDER現象を実現するのは「gender」カテゴリーの指令機能であるが、SEX現象を発現するのは「sex」カテゴリーの認知機能ではなくて遺伝情報の指令機能である、という事実を忘失しているかにみえる。言語の認知機能でしかないものを言語の指令機能と誤認するわけである。言語が登場する以前の世界はすべてカオスだとする主張は、認知的秩序と指令的秩序との、認知的カオスと指令的カオスとの差異化・分節に失敗している。言語が登場する以前の世界は、言語に先行する脳神経的プログラムや遺伝的プログラムの情報機能によって、さらには物理・化学法則によって構成・秩序化されている。「脳神経的プログラム」や「遺伝的プログラム」や「物理・化学法則」などの言語現象それ自体が世界を「実践的・指令的」に構成したのではない。それらは世界を人間の視点から「認知的」に構成したものにすぎない。

23】これとは反対に、「神」は、本来、民族や国家や企業と同様、言語の指令機能によって作り出された言語的構成物ないし制度的存在者の一例であるにもかかわらず、物理・化学的世界や生物的世界など、人間的世界にとっての先所与的世界に属する何ものかを認知・表現したものと誤解されて、その存否が問われる。神の存否をめぐる言説という人類の膨大な遺産は、言語の指令機能を認知機能と誤認した結果なのである。民族や国家が実在するとすれば、神もまた実在し、民族や国家が幻想であるとすれば、神もまた幻想である、といった主張の可能性や妥当性を慎重に検討すべきであろう。神問題は「制度的存在者の存在」という新たな存在論の構築・彫琢をまってはじめて解決されるべきテーマであり、それは伝統的な哲学的存在論の射程を超えている。

私の立場からすれば、「sex」のケースも「神」のケースも言語使用の第3 Fallacyの事例にほかならない。認知機能を担う言語すなわち「世界認識のための言語」と、指令機能を担う言語すなわち「世界制作のための言語」とを混同してはならない。「太陽」や「林檎」や「sex」は前者、「gender」や「神」や「国連」は認識にも利用されるが、まずもって後者なのである。

III　社会学的世界と狭義の生活世界との相互循環——主体の側の社会学的リアリティ——

H　当事者言語と研究者言語、当事者視野と研究者視野

24】さて、以上に示したような事実的秩序（phenotype）と情報的秩序（genotype）とに関する社会学の基礎データは、なによりもまず当事者自身の使用する記号、すなわち言

語情報的秩序に焦点を合わせる本稿では当事者の使用する言語――その中核に当事者の自然言語が位置している――によって表現されたものでなければならない。この言語を当事者言語または資料言語と呼ぶことにしよう。

人間によって生きられる言語性情報空間（事実的秩序に関する情報と情報的秩序を構成する情報）をひたすら当事者の立場で記述・説明するという研究目的からするなら、研究は当事者言語による記述・説明でなければならないし、また当事者言語による記述・説明であるだけでよい。

25】けれども、研究者がその当事者言語による個別的・一般的な記述・説明にさらなる普遍化や理論化を求めようとするかぎり、あるいは、異なる自然言語で生きる人びとの情報空間の比較対照、とりわけ異文化のあいだの比較対照を志すかぎり、特定の当事者言語にとどまることが不可能になる。こうして普遍的理論化や比較対照という研究目的を設定するとすれば、研究者に独自の言語の開発が要請されることになる。これを研究者言語または理論言語と呼ぶことにしよう。

むろんこの研究者言語や理論言語自体が、日本語やラテン語や英語やフランス語など、何らかの自然言語の「記号」（ソシュールなら記号表現）に依存せざるをえないというディレンマがある。だが、その際要請されるのは、記号（記号表現）の間主観性ではなく、その意味表象（記号内容）や指示対象の間主観性なのである。であれば、不可能なことではないだろう。

26】ところで、以上の「当事者言語 対 研究者言語」のダイコトミーと混同されやすいのが「当事者視野 対 研究者視野」のダイコトミーである。ここで当事者視野とは当事者の視点とその視点に開かれた意味世界ないし情報空間であり、研究者視野とは研究者の視点とその視点に開かれた意味世界ないし情報空間をいう。当事者視野が当事者言語によってしか表現できないわけではなく、研究者視野が研究者言語によってしか表現できないわけでもない。通例「当事者視点」というとき、「当事者言語」と「当事者視野」との区別はかならずしも考慮されていない。もちろん厳密には、当事者言語と当事者視野とは、詩的言語にその典型を見るように、分離できないのも事実であるが、そうであれば、異なる言語を使用する情報空間の比較研究や一般化は不可能になる。人文社会科学における異言語情報空間の比較や理論化は、言語Xで語られた視野を言語Yに翻訳できるという前提を不可避としている。なお、この「言語」と「視野」との区別が、Ⅰ節でも活用された「コード」視点と「メッセージ」視点との区別であることを付言しておきたい。

Ⅰ 社会学的研究の4フェーズとその相互連関

27】当事者言語と研究者言語、および当事者視野と研究者視野という2セットのダイコトミーをクロスさせると、つぎのような4タイプの研究、ないし研究の4フェーズを区別することができる。それは物理・化学や生物科学には見られない、言語情報空間を対象にすえる人文社会科学に固有の研究スタイルの分化というべきものである。

第1タイプないしフェーズは「当事者言語による当事者視野の表現」であり、研究者が当事者自身の意味世界ないし情報空間を当事者の言語で忠実に再現するというタイプの研究である。社会学の基礎データのあるべき姿にほかならない。エスノメソドロジーの会話分析はまさにこのフェーズのデータからスタートする。第2タイプないしフェーズは「研究者言語による研究者視野の表現」であり、研究対象をめぐって研究者がみずから開発した独自の理論言語で独自に構成する意味世界ないし情報空間を意味している。第1フェーズの研究の対極に位置する研究スタイルであり、理論社会学の描く世界像にほかならない。「事実的秩序と3層の情報的秩序との相互循環」という上述の理論的命題は、その一例である。

第3タイプないしフェーズは「研究者言語による当事者視野の表現」であり、当事者言語によって表現される当事者視野を研究者言語による表現に置き換えるというタイプの研究である。基礎データを理論言語による表現に変換するというタイプの研究にほかならない。当事者言語と当事者視点にもとづくケース・スタディそれ自体は第1フェーズの研究であるが、第2フェーズで構築された理論をその種のケース・スタディで実証する、あるいはその種のケース・スタディで一定の理論を構築するという研究は、この第3フェーズに属している。そして第4タイプないしフェーズは「当事者言語による研究者視野の表現」であり、研究者言語によって表現される研究者視野を当事者言語による表現に置き換えるというタイプの研究を意味している。第2フェーズで構築された理論を検証するための、当事者言語で書かれたアンケート調査、つまり仮説ー演繹的に導かれた命題を検証するための質問紙調査は、この第4フェーズに属している。エスノメソドロジーの業績の多くは、本稿の視点からすれば、「情報的秩序の作業水準と不可分の事実的秩序」の産出をめぐって、第1フェーズと第3フェーズを統合した研究であるといえるだろう。

見られるとおり「言語」（コード視点）と「視野」（メッセージ視点）との区別を導入しなければ、第3フェーズと第4フェーズは見えてこない。となれば社会学者の研究は、単純に第1フェーズと第2フェーズを識別しうるだけのものになるだろう。

28】当事者によって生きられる日常的な情報空間を狭義の生活世界と名づけるなら、その狭義の生活世界が、近代科学の発展とともに、理系・文系をとわず各領域の科学的情報空間ないし科学的世界と相互に浸透するようになってきた。この科学的世界と狭義の生活世界とが相互交流する世界ないし情報空間を広義の生活世界と呼ぶことにしよう。

上述した4つのタイプの社会学的研究は、社会学が構築する科学的世界ないし科学的情報空間の4つのフェーズだということができる。第1フェーズの研究は、社会学的世界ないし社会学的情報空間の内部で狭義の生活世界を代表するという位置づけになる。それに対して第2フェーズの研究が、社会学者独自の世界ないし情報空間であり、第3フェーズと第4フェーズの研究が、社会学的世界の内部で、狭義の生活世界と社会学的世界とを相互交流させる場だということになる。狭義の生活世界が当事者によって生きられる世界だ

とすれば、広義の生活世界は、そのあるべき姿としては、当事者と研究者とが相互に交流しながらともに生きる世界であることを期待されている。

29】しかしながら、現実の社会学的情報空間は、上記4つのフェースがそれぞれ欠落したり分裂して相争ったりというのが実状である。とりわけ、第1タイプの意味学派志向と第2タイプのシステム理論志向や数理解析志向との対立は周知のものである。

私がタイプといわずにフェーズというとき、それは4つのスタイルの研究が、社会学的情報空間の相互に密接不可分な、相互補完的領域であることを力説したいがためにほかならない。ただし、この4フェーズの研究は、一人の研究者によって実現可能であるとは必ずしもいえない。むしろ社会学者共同体の分業によって実現すべきものと考えた方が現実的であろう。

J　感覚運動情報空間から言語情報空間への情報圧縮

30】ところで、社会学的情報空間の第1フェーズがどれほどヴィヴィッドに狭義の生活世界を当事者言語と当事者視野で再現したとしても、あるいは第3フェーズと第4フェーズが実証的にどれほど妥当な社会学的命題の構築に成功したとしても、それはあくまでシンボル性の、とりわけ言語性の情報空間でしかない。所詮、当事者が生きる感覚運動情報空間のリアリティには及ぶべくもない。このリアリティ感覚の相違は、当事者と研究者のあいだにあるわけではなく、感覚運動情報空間と言語情報空間とのあいだにある。この点を誤解すべきではないだろう。言語情報空間は抽象性や普遍性というそれ独自の特性をもっているが、感覚運動情報空間の視点からするかぎり、感覚運動情報空間を情報圧縮したものでしかない。したがって、当事者の感覚運動情報空間が研究者とのあいだで間主観化されなければ、研究者サイドのリアリティ飢餓感は解消されない。もちろん、徹底した参与観察は、主に第2フェーズに傾斜する統計的データによる研究に比べて、感覚運動情報空間の間主観化に貢献しうることはいうまでもない。

だが、狭義の生活世界自体における感覚運動的・言語的な自生的間主観化が関係者の試行錯誤にもとづき完全なものではありえない以上、狭義の生活世界を生きる人びとのリアリティ感覚それ自体にも限界があるというべきであろう。とすれば、研究者サイドのリアリティ飢餓感は、リアリティに関するアスピレーション・レヴェルの相違であるといった側面を無視できないはずである。同種のフェーズの研究に従事する研究者のあいだに見られるリアリティ飢餓感の格差は、そのことを傍証するものであろう。

K　実証的接近と設計的接近（伝統的表現なら、記述的接近と規範的接近）

31】社会学的研究は、フェーズ論から目を転じるなら、対象のあるがままの姿を捉える「実証的接近」と対象のありたい姿・あるべき姿を構想・デザインする「設計的接近」とに分かれる。ここで「設計的接近」とは、研究者や当事者がⅠ節で述べた「可能態としての規範的・非規範的な情報的秩序」を設計することを意味している。この2つのアプローチは上述した社会学的情報空間の4つのフェーズのすべてにわたって妥当する。4フェー

ズをその視点から記述し直すなら、第１フェーズは、当事者自身の実証的・設計的接近を当事者言語を用いて再現するという研究、すなわち、当事者が認識する事実的秩序、当事者が認識する現実態の情報的秩序、およよび当事者が構想する可能態の情報的秩序を当事者言語を用いて再現するという作業である。第２フェーズは、研究者自身の言語と視野による実証的・設計的接近の構築、すなわち研究者自身が認識する事実的秩序、研究者自身が認識する現実態の情報的秩序、および研究者自身が構想する可能態の情報的秩序を研究者言語を用いて表現するという作業である。第３フェーズは、当事者の実証的・設計的接近を研究者言語に翻訳するという研究、すなわち、当事者が認識する事実的秩序、当事者が認識する現実態の情報的秩序、そして当事者が構想する可能態の情報的秩序を研究者言語を用いて表現するという作業、第４フェーズは、第２フェーズで構築された研究者自身の実証的・設計的接近を当事者言語に翻訳する研究、すなわち、研究者自身が認識する事実的秩序、研究者自身が認識する現実態の情報的秩序、そして研究者自身が構想する可能態の情報的秩序を当事者言語を用いて表現するという作業である。

32】ここで可能態の情報的秩序の構想とは、前述のように、情報的秩序のありたい姿とあるべき姿についての構想であり、当事者または研究者による設計的接近にほかならない。第３フェーズと第４フェーズが、当事者の実証的・設計的接近と研究者のそれとを相互チェック・相互テストする交流の場であることはいうまでもない。

当事者の実証的接近（の再現）と研究者の実証的接近との相互循環、および当事者の設計的接近（の再現）と研究者の設計的接近との相互循環が重要な主題であることはいうまでもないが、当事者の実証的接近（の再現）と研究者の設計的接近との相互循環、および当事者の設計的接近（の再現）と研究者の実証的接近との相互循環もまた、当事者と研究者それぞれの設計目標の実現可能性、あるいは実現可能性の設計目標化という視点から興味あるテーマとなるだろう。

Ｌ　４つの研究フェーズの設計科学的展開に向けて

33】科学的世界と狭義の生活世界との相互循環は、近代科学の成熟とともに拡大・深化してきた。とりわけ物理・化学および生物科学にもとづく工学的・設計的な科学的研究の成果が、工業化と情報化という２つの段階からなる高度産業社会の成立にとってまさに不可欠の条件であったことはいうまでもない。科学的世界と狭義の生活世界との相互循環は、一方、狭義の生活世界が科学的世界の基盤ないし地平を提供し、他方、科学的世界が狭義の生活世界の認知的・評価的・指令的構成のあり方を変容させるという形の循環が代表的なものであろう。たとえば地動説、有害物質の許容量、各種の科学技術などの生活世界への浸透は、それぞれ、生活世界の認知的構成、評価的構成、指令的構成の変容にほかならない。しかしながら、人文社会科学の場合、狭義の生活世界それ自体が研究対象でもあるという特質があり、生活世界自体が、自然科学の場合と異なって、広く深く科学的世界の内部に浸透している。本稿で定式化した社会学的世界の４フェーズは、前にもふれたが、

自然科学的世界にはない人文社会科学的世界に独自の構造なのである。

34】近代科学の成熟に伴う科学的世界と狭義の生活世界との相互循環の拡大・深化は、体系的・包括的には、つぎの3つの観点から検討する必要があるだろう。第1は、実証科学が生みだした認識の生活世界への浸透とそれに対する生活世界からの需要、第2は、実証科学に対置される設計科学が生み出した成果の生活世界への浸透とそれに対する生活世界からの需要、そして第3は、一方、共時的には日常生活世界化とグローバル化（たとえば両サイドからする生活欲求への密着や地球環境問題の登場）、他方、通時的にはタイム・スパンの長期化（たとえば両サイドからする後続世代を考慮する資源の世代間配分といった視点の登場）、すなわち相互循環における空間的・時間的スコープの拡大である。

こうしてみると、社会学的研究における4フェーズのあいだの争い、とりわけ第1フェーズ（当事者言語による当事者視野）と第2フェーズ（研究者言語による研究者視野）との争いがいかに無益なものであるかが判明する。と同時に、第3ならびに第4フェーズの媒介的機能の重要性も浮び上がってくる。要は社会学者集団における分業なのである。その分業を成功させるためには、みずからの役柄や持分の自覚がなければならない。本稿の研究4フェーズ論は、その役柄自覚のための枠組みでもある。

35】とりわけ社会学の場合、これまで実証的接近が優位して、設計的接近が劣位に置かれてきたことは否めない。今後、社会学的な設計的接近への社会的需要が増大するに違いない。というより需要が増大しなければならない。その種の需要が増大し、かつそれに社会学が的確に応えることができなければ――需要に応じられなければ、需要それ自体が減退する――、「制度としての社会学」の社会的アイデンティティは弱体化し、また崩壊しかねないだろう。

この「設計科学」としての社会学――「実証科学」としての社会学ではなく――という観点からすれば、社会学的世界の4フェーズはその様相を一変する。第1フェーズは当事者自身による行為設計（可能態の陽プログラムの一形態）やシステム設計（可能態の陰プログラムの一形態）を忠実に再現すること、第2フェーズは「設計科学としての社会学理論」の構築、第3フェーズは当事者設計の研究者言語（理論言語）による翻訳、第4フェーズは研究者設計の当事者言語への翻訳、をそれぞれ中核に置くような、もう一つの社会学的世界にほかならない。社会学的世界が、実証科学と区別された設計科学としての色彩を拡大・深化させるほど、「狭義の生活世界の当事者言語と当事者視野による再現」、「実証的に妥当な社会学的命題の構築」、あるいは「当事者と研究者による感覚運動情報空間の共有」などのルートとは別の形で、社会学者のリアリティ飢餓感は解消に向かうといえるかもしれない。Ⅰ節で述べた「事実的秩序と情報的秩序との相互循環」それ自体に、社会学者が設計科学的に、つまり認知的にではなく指令的・実践的に参入するということにほかならない。

36】最後に、いわゆる「時代感覚・時代認識」なる社会学的リアリティにふれておくな

ら、時代のタイム・スパンを自覚的に問題にする必要がある。ニュース解説者の短期的な時代感覚・時代認識と、歴史意識ともいうべき中・長期の時代感覚・時代認識とを混同すべきではないだろう。ジャーナリズムや狭義の生活世界の時代感覚・時代認識が評論家のそれを含めて短・中期の時代感覚・時代認識に傾斜するとすれば、社会学的世界などアカデミズムのそれは、短・中・長期の時代感覚・時代認識のすべてを、これまた分業体制のもとで要請されているというべきだろう。なかでも中・長期の時代認識——たとえば、ポストモダンか近代の延長か——は、社会学的世界が狭義の生活世界へと提供すべき重要な知的資源の一つに数えられるが、その際、狭義の生活世界の短・中期の時代感覚・時代認識を、社会学的世界の中・長期のそれの中で的確に位置づけるという作業が、決定的な意義を有することになる。

以上を要するに、「社会学的世界」と「狭義の生活世界」との相互循環、ならびにその相互循環で構成される「広義の生活世界」の充実こそが——その充実の中身がじつは本稿の指摘のように肝要であるが——、研究主体の側に私が見出す「私にとって」の社会学的リアリティなのである。

（よしだ　たみと　慶應義塾大学文学部前客員教授）